

## —貧困概念と人間存在—レヴィ＝ストロースを読む—はじめに、蝶番

### I. レヴィ＝ストロースを読む

#### はじめに

飢饉の中を生き延びてきたのが人類であり、天変地異を越えて、食べ、纏<sup>まと</sup>い、家族を成し、生きつづけている人間であり、富める者と貧しいものが織りなす人間の歴史である。

人間の幸せ、その不足から貧困を測るのが伝統的な厚生経済学的手法でありその拡張が試みられているが、人間の生活、存在様式についての人類学的知見まで降りて行くことで、貧困の構造について新たな視点を獲得することができるのではないだろうか。

#### ☆ 文化人類学について

人類学とは「人類の進化、遺伝、生態、変異、文化、言語、社会組織、宗教、物質文化などについて研究する学問のことを広く人類学」といいますが、生物としてのヒトを対象とする自然人類学と、ヒトの作り出した文化や社会構造などを対象とする文化人類学に区別されます。

文化人類学とは、「世界の民族の文化・社会を言語、習慣、社会構造、家族、道具、芸術などを研究対象として、解明してゆくことを目指し、かつては民族学と呼んでいましたが、最近では文化人類学とか社会人類学とよばれることが多くなり、民族学、民俗学、考古学、言語学、心理人類学、医療人類学、経済人類学など多くの学問領域と境界を接しています。」

(<http://anthropology.jp/what/jinrui.html> より抜粋)

レヴィ＝ストロースは、人類学の独創性は「それぞれの時代において人間性の限界とみなされている地点に立って、人間を研究する事にある<sup>1</sup>。」として、それ故に生物学、人口統計学、経済学、社会学、心理学、哲学——との関係をめぐる一連の問題に触れる、「隙間を突く」科学であるとする。

#### ☆ レヴィ＝ストロースについて

クロード・レヴィ＝ストロース (Claude Lévi-Strauss, 1908年11月28日 - 2009年10月30日) はアルザス出身のユダヤ人の家系、イトコ同士結婚の夫妻の下に生まれ、父親の職業は画家であった。エコールノルマル (フランスのエリートコース) の受験準備の高校時代にフロイド、マルクスの影響を受けたと言う。受験をあきらめてパリ大学 (ソルボンヌ) を卒業し法学の学士号を取得するかたわら哲学を学び、1929年アグレガシオン (哲学教授資格試験) に合格し、これに続く実習ではボーヴォワール、メルロー＝ポンティらと同期 (サルトルは一回落ちて、一年後輩) であった。

1935年高校教師を退職し、サンパウロ大学の社会学講師として渡り、休暇中にブラジル内陸のマトグロッソ地方に居住していたポロロ族の調査、1938年から1939年にかけてブラ

---

1 レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P41 講談社選書 2009年6月

ジルの内陸部を横断する長期調査を行い、ナムビクワラ族やトゥピ＝カワイブ族など、アマゾン川の支流に暮らす民族の調査をしている。1939年帰国後に服役、マジノ戦線に配属されるが翌年敗戦で除隊、1941年ニューヨークの「新社会研究院」の講師として亡命生活に入る。ここでヤコブソンと出会い1943年には「親族の基本構造」を書き始めている。

1947年パリ解放後フランスにもどり、『親族の基本構造』を完成させて1949、1950年コレッジ教授選へと立候補したが失敗、その後みずからの方法論を冠した初めての論文集『構造人類学』を（1958年）執筆し、ユネスコの反人種主義キャンペーンのための小冊子『人種と歴史』（1952年）を執筆している。1955年の自叙伝的色彩をもった民族誌風の著作と言われる『悲しき熱帯』の刊行により、その名は一気に世間に知れ渡ることになった。

1959年に親友メルロー＝ポンティの尽力もありコレッジ教授就任がかない、これと前後して、研究活動の中心は拠点としてはコレッジにおける毎年度の講義に、主題としては高等研究実習院のセミナー担当以来取り組んできた、未開社会の宗教研究とりわけ未開社会の神話の研究へと移った。（その記録が後年『パロール・ドネ』として出版された。）

パリの人類博物館や高等研究実習院の人類学関連部門と連携しつつセミナーを運営しながら研究活動を行うという活動は、1984年のコレッジ退職まで続けられ、この間に刊行された著作は、1962年『野生の思考』、『今日のトーテムズム』、1964年～1971年の『神話論理4巻』、そして1969年度講義をもとにして1992年に刊行された『大山猫の物語』など。まず講義において着想が練られ、聴講者との議論を経たのちに著作として刊行されている。その後、『やきもち焼きの土器作り』『大山猫の物語』『永遠の回想』などを刊行し2009年100歳にて没した。

専門分野である人類学、神話学における評価もさることながら、一般的な意味における構造主義の祖とされ、彼の影響を受けた人類学以外の一連の研究者たちとともに、1960年代から1980年代にかけて、現代思想としての構造主義を担った中心人物とされている。

コレッジ・ド・フランスで催された1998年90歳のお祝いでの挨拶の中で、レヴィ＝ストロースは、老いの日々についてこう語った。

「こうして今日の私には、一人の人間の四分の一あるいは半分でしかない現実の私と、全体の理念をまだ生き生きと保持するヴァーチャルな私とが存在しています。ヴァーチャルな私は、著作の計画を立て、章立てを考案し現実の私にこう言います。『さあ続きは君がするのだ』すると、もうそうはできない現実の私がヴァーチャルな私に言います。『それは君の仕事だ。全体を見る事ができるのは君なのだから』今の私はこのおかしい対話のなかで日々を送っているのです。」

（ウィキペディア、「闘うレヴィ＝ストロース」「寝ながら学べる構造主義」、他）

## 1. 自然と文化を繋ぐ蝶番としての婚姻規制

### ①自然と文化

2009年10月30日100歳の長寿を全うしたレヴィ＝ストロースは、その最初の著作「親族の基本構造（1949年）」において、その序説第1章を自然と文化としている。この中でレヴィ＝ストロースは、「すべて普遍的であるものは、人間にあっては、自然の秩序を表し、自然発生性によって特徴づけられる。そして、ある規範に縛られるものはすべて文化に属し、相対的であり、特殊であるという属性を示す。<sup>2)</sup>」として自然と文化を区別している。

自然と文化の区別、関係については、ギリシャの昔から「<ロゴス＝知性・精神>/<パトス＝感性・身体>」と言う単純な分割線が引かれ、これが<文化>/<自然>の対立にも置きかえることになった<sup>3)</sup>と言う指摘がみられる。

### ②婚姻規則（インセスト・タブー）の謎

1949年、『親族の基本構造』が出版された当時、進化論的、伝播論的、そして機能主義的な人類学は「どうして近親の位置としては同じイトコのなかのあるタイプのイトコとの結婚が優先され、別のタイプのイトコとの結婚は「インセスト（近親婚/近親相姦）」として禁止されるのか」また「人間社会に普遍的にあるこのタブーは何のためにあるのか<sup>4)</sup>」と言う二つの謎を解く事ができなかった。

この二つの謎に対してレヴィ＝ストロースは、この規則が、自然の要請と文化の要請の双方にまたがっているとして、「それぞれの文化によって恣意的で特殊な規則でありながら、普遍的なものと言う性質を持っているが故に、婚姻規則（インセスト・タブー）は自然と文化の相いれない二つの次元の両方に属する矛盾した規則であり、自然と文化を分けると同時に繋ぐ蝶番となっているような特異な規則<sup>5)</sup>」として現れるとしている。

### ③ 婚姻規則と親族関係

親族関係を規定している婚姻規則（インセスト・タブー）は、社会的な規律として集団の存続のために必要な規制（文化の領域）でありながら、すべての社会に於いて見られる、生物種としてのホモサピエンスに普遍的な規律（自然の領域）であると考えられる。

『親族の基本構造』の主題について、渡辺公三は「親族関係の生成こそ人間の生成すなわち、人間の自然状態から文化の状態への移行をしるしづけるもの」として、エンゲルス

---

<sup>2)</sup> クロード・レヴィ＝ストロース 監訳馬淵東一・田島節夫『親族の基本構造（上）』P64 番町書房 昭和62年3月20日

<sup>3)</sup> 丸山圭三郎 『言葉と無意識』P28 講談社現代新書 2009年7月

<sup>4)</sup> 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P082 ちくま新書265 筑摩書房2013年9月

<sup>5)</sup> 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P083 ちくま新書265 筑摩書房2013年9月

の「サルの間人化に当たっての労働の役割」をもじりつつ、「サルの間人化における親族関係の役割」<sup>6</sup>こそが主題であるとしている。

自然と文化という二つの別個のものともみなされる異なる領域のつなぎ目にあつて、人間が自然から文化状態に移行する時の、「人間集団のカテゴリー化と表裏一体をなして、集団間のコミュニケーションを生成する。<sup>7</sup>」のが婚姻規則（インセスト・タブー）であり、人間社会は、婚姻による女性の他集団への交換を通して、各親族集団（親族、姻族など）の形成、そして集団間の交流を生じせしめて促すのであり、このようにして人間は文化へと、親族をなし、社会を形成し、自然から文化へと移行したという。

西洋人の略奪によって集団の消滅の危機に瀕するナビクワラの人々は、若きレヴィ=ストロースの眼前で、遭遇した集団との婚姻関係を取り結ぶことで生きて見せたという<sup>8</sup>。

---

<sup>6</sup> 渡辺公三 『闘うレヴィ=ストロース』 P125 平凡社新書 498 2009年11月

<sup>7</sup> 同上 P127

<sup>8</sup> 渡辺公三 『闘うレヴィ=ストロース』 P128 平凡社新書 498 2009年11月